
第5話 帰らざる時の果てその1

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第5話 帰らざる時の果てその1

【Nコード】

N6189Y

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

剣ミサトは盗賊団のアジトに潜入していた。途中で出会った囚人ボスコと共に地下実験室へ行く。人造人間ROUSE部隊の捜査に向かう二人。そこで見た物は、魔法使いには禁じ手とされていた古代魔法。サクリアイス（生け贄）の印だった。二人は急いで脱出し、この事実を伝えようとする。だが時は既に遅かった。監視メカによって、つけられていた二人。その映像を公開し、盗賊団の力を知らしめようとするショットガンナー。遂に両雄は決戦の舞台に立つ。

武力介入決行

ミサトはまだ息があつた。

ガハッ！ガハッ！

崩れ落ちた体を引きずりボスコに向かう。

「ボツ……………ボスコ。すまない……………足手まといに……………」
「んなこと、言うなだ！オラを相棒と呼んでくれたべさ。田舎者のオラを！レオさん。早く手当てを！」
「……………お前は？」
「オラ、ミサトと約束しただ。必ず勝つと。勝つて故郷に錦を飾ると」
「……………そうか。無理はするなよ。それがお前の宿命なら俺達はここで見ていよう。無理はしない程度にやっただれ！田舎者」

「ウググググッ……………ボスコ。アタイからの礼だ。受け取れ」
ミサトは最後の力を降り絞り、魔法のコタチを作った。ボスコは丁寧にそれを貰い、キツとショットガンナーを睨み付ける。

ミサトはコタチをボスコに渡し、満足そうに目を細める。そのまま横になり、ボスコの雄姿を観戦する。

手負いのボスコに無傷のショットガンナー。彼の後ろには虎のオーラが赤く輝いていた。

「ウォー！烈火爆煙破！」ボスコは弾薬を抱え彼に飛びかかる。タツクルで押し倒し、そのまま弾薬に火を点ける。「終わりだー！ショット！」ボスコは彼を抱えたまま、宙に舞う。「これはミサトさんの技だ！コタチ列破斬！」ボスコは二本のコタチをショットの肩に刺す。

「ウォー！爆煙天昇！」

ボスコは自分の弾薬を抱えて爆発した。

その瞬間、空中でクルツと方向転換しキックで彼を蹴り飛ばすショットガンナー。

爆風に包まれる盗賊団のアジト。

「どうだ？やったか？チャンク」「わからない。だが煙の中、誰かが立っている。うつすらとだが見える」「二人は目を凝らしてその姿を見る。

しばらくすると爆風の霧が晴れてくる。そこに立っていたのはショットガンナー。ボスコの肉体は砕け散った。ミサトはその光景を見る前に亡くなっていた。あのコタチは彼女が残した最期の希望だった。

「クツクツクツ。残念だ。非常に残念だ。お二人さん。肩慣らしにもなりやしないね。まったく狭き器よ」「黙れ！ショットガンナー！貴様、マリアでは飽きたらず、ミサトやボスコまで手に掛けるとは！許さんぞ！」「フッフッフツ。レオ君。大人げ無いぞ。たかだか三人では無いかね？しかも我輩の様な武人ならまだしもウジ虫のカスにも満たない三人。何の役にも立たぬ者達では無いかね？」「……………ショットガンナー。今の戦いで力は認めよう。だが生き物を愚弄した罪は償って貰うぞ。今日はサービスで引いてやるう。ミサトの亡骸は貰ってくぞ。行こうレオ」チャンクは冷静に怒りを抑えた。

「面白い。リターンマッチといこう。今日はタイムアップだ。私の力を見せしめるには、充分だろう。準備が出来たらまた来てくれな
いかな？私はここで待とう」「……………ショットガンナー。お前には

冥土すら生温いわ！永遠の闇が相応しい。永遠の中でせいぜいもがくが良い」

レオは別れ際にそう言い残し、去って行った。ミサトの亡骸を抱えて。

ボスは頭を抱える。「……………なんと言う事だ。保安官が……………人民の安全を考えなければならぬ保安官が……………ウジ虫やらカスにも満たないやら……………シヨットガンナー。恐ろしい魔神よ」「……………寂しくなりますね。ボス」情報屋は静かに部屋の扉を閉めた。

「上層部より伝令。これ以上は待てん。ボス。上陸許可を」「……………上層部の方々。これよりウエストホース大陸への上陸を許可します。お気をつけて……………」ボスは机に置かれたレオとピートの保安官バッチを見た。「……………すまない。私が潜入許可を出してなければ助かった命が。レオ、ピート。本当に申し訳無い。私の判断ミスだ。恨むならワシを恨め。それで良い。それで……………」

遂に上層部の武力介入が解禁された。何一つ手掛かりも無い状態で、大陸は混沌の時代を迎える。

続く

帰らざる時の果て その2

レオ・バレッタとチャンクは盗賊団のアジトを後にした。

「ピート。待たせたな。帰ろうか?」「……………お疲れさまでした…………… たった今、上層部が進撃したらしいですよ」「明朝じゃなかったのか?」「エエ。早まつたらしいです。ボスも上陸許可を出しました」「…………… だろうな。俺だつて助けたかつたさ。マリアにしてもだ。これからどうなる?」「今、調べてます。上層部の武力介入をした大陸がどうなるか。あんまり良い噂は聞きませんがね」

一方、上層部には一人の男が訪ねていた。「入りたまえ」「失礼いたします。浮游城の元皇帝、アインシャーク三世を連れて参りました」「ウム。通せ」「失礼いたします。元老院。私は浮游城の皇帝、アインシャーク三世です」「くるしゅうない。楽にしてくれ皇帝閣下。どのようなご用件で?」「ハイ。オーブの欠片の手がかりを探してまして……………」「オーブの欠片?神々の遺産だと言われるアレか?」「左様でございます。ご存じで?」「フム。世界の調和を司るオーブ。調和の聖宝じゃな。して、それが皇帝閣下とどのような関係で?」「調和のバランスが崩れかけております。浮游城は沈み我々は古代の飛空艇ジュブナイルで参りました。それにこのオーブと共に」「…………… それは、火のオーブ。貴方が継承者だと?」「ハイ。私の祖先。始皇帝ロキが残した遺産です」「…………… すまないな。今、忙しいんじや。急ぎウエストホースへ向かわなくては……………」「ウエストホース大陸へ?何かあったのですか?」「上層部の元老院は全て話した。」

「なるほど。それは一大事ですな。我々も加勢いたしましょう。ちょうど火の神、インフェルノの遣いアドニスもいますし。我々もジュブナイルで向かいますよ。神々のご加護も必要でしょう」「オオ。頼めるか？皇帝閣下」「お引き受けいたしましょう。盗賊団となればいずれ争う事となりますし。都合が良いです。ご同行させて下さい」「ありがたい。今は戦力が欲しくてな。オーブの情報はこちらにも興味がある。調べさせよう」「ありがたいございます」

「で、皇帝閣下。引き受けたのですか？その盗賊団討伐の話しを？」「アア。しようがないだろう？あの場では。仮にワシが断つたら何をされるか。そうだろう？」「まあ、間違っちゃいないですがね。アインシャーク。今度、寄り道する時はご相談を」アドニスは席を立ち飛空艇から外を見た。「で、そのウエストホースには行った事はあるんですかね」「ならず者の大陸。立場上、避けて通っていたな」「へ？ならず者？そんな所に手がかりをなんて無いと思いませんか」「噂では、土の神、ライダーが降り立った地だと言う話だがな」「そりゃ、行きましようよ。アインシャーク。パパッとすましてサクッとその聖宝を頂きましょう」

一方、剣ミサトとボスコは黄泉の世界にいた。

「ン？ナンド？こいつ。ナア、ジャック。ジャック・ギャザリス！来てくれよー」「パトレシア！何度言ったらわかるんだ！前足で蹴るなど。お前は馬なんだからおとなしくしてろって！だから暴れ馬なんてレッテルを貼られるんだぞ」

「ン？女と男か？無理心中でもしたかな？オーイ！聞こえますか？わかりますか？」「……………ン……………痛みが無い。ここは……………」
「オオ。気づいたか？ミサト」「ボスコ？あんた何やってるのさ。シヨットガンナーは？」「オラ達、死んだらしいな。ここは黄泉の世界なんだとさ。迎えてくれたのは、あの人と馬らしいな」
「アー……………イッテテ……………まだ痛むわ。ありがとうございます。貴殿方は？」
「重い体を起こしミサトが聞いた。「気づいたか？俺はジャック。ジャック・ギャザリス。神殿の警備員だった男さ。パンドラの聖杯を守る警備員。で、こいつは……………」」「パトレシアです。愛馬パトレシア。好きな物は干し草やら野菜やら。持ってません？」「ウワツ！馬が……………喋った」「亡くなった人が喋る方が不思議ですよ。ジャック」「ハハハ……………お互い様だ。どうだね？少しは体が慣れたかね？」「エエ。少しは。私は剣ミサト。クノイチの魔法使いよ」「オラはボスコ。囚人の魔法使いだべ。パンドラの聖杯って、浮游城だべか？」「そうさ。行った事あるのか？」「バカにスツでねえ。オラは盗賊だべ！知ってるべさ」「で、盗賊さん。エサは？オイラ腹減ったなあ。なんか頂戴よ。お手もお座りもできるんだぜ。何でもするからさ」「パトレシア！何度言ったらわかるんだ！エサの恐喝はするな！足りてるだろ？」「ハ……………」

…わかつてるよー。ちょっとオネダリしただけだろ？恐喝未遂だつて」「すまないな。気にするな。軽く流せば良い。で、どうするんだ？これから」「わからないわよ。だって来たばかりですもの。黄泉の世界に」「そうだったな。まあ、時間は腐るほどある。ゆっくりしていきな。少しは骨休めになるだろう？で、何故ここへ来た？」「ミサトとボスコは全てを話した。

「なるほど。で、亡くなったと。そのショットガンナーに」「待てよ。ジャック。確か3年位前に会ったぜ。オレ見たもん。その……ショットガンナー？ちょうどその山を散歩して、トイレに行つて……アレ？どこだっけ？」「パトレシア！本当か？俺の留守中に？案内しろ」「知らねえつて。3年も前だぜ。3年前にどこで用を足したなんて覚えてるかつて！」「つまり……一度はこつちに来てるのよね。あの山の何処かに。行きましようよ。ボスコ何か掴めるわよ」「……オラ、行くのは構わねえが行つてどうスツだ？生き返るか？できるわけねえべさ」「イヤ。出来るさ。やり残した事があつて寿命が残つてる時はな」「へ？出来るだか？」「出来る。1日限定だがな。ホレ。あんたらの噂を聞きつけた奴もいるみたいだぜ。出てこいよ！隠れてないで！」「……さすがだね。あんたが新しい保安官か？イヤ。悪く無いね」「貴女は？」「マリアだよ。レオ・バレッタの元、相方であり恋人でもあつた人さ。心配するな。奴も水臭い奴でさ、毎日アタイの墓碑に祈りを捧げてるのさ。話しは全部聞かせて貰ったよ。黙って見ているガラじゃないんでね。介入させて貰うよ。勝手に入るからね」「マリアさん。……噂には聞いています。レジエンドハンター・マリアですよね」「レジエンド？そうかいアタシヤ生きた伝説かい？似合わない肩書きだねえ。虫酸が走るよ」「行きましよう。あの山に。パトレシア

さん。連れて行って下さい。良いですよ。マリアさん」「オラもいぐだよ」「ボスコ?」「いぐだよ。ナツ良いべ?どうせ暇になるんだ」「ハー……………しょうがない。パトレシア。散歩だ。散歩だからな。俺達は生き返れない。そうだろ?案内だけだからな」

こうして、アインシャーク三世、アドニス of 浮游城チームとパトレシア、ジャック・ギャザリス、剣ミサト、ボスコ、マリアの新しい旅が始まった。

(詳しくは、第1章を参照して下さい)

続く

帰らざる時の果て その2

レオ・バレッタとチャंकはマリアの墓碑の前で酒を煽っていた。

「チャंक。俺は……俺はこの大陸を出ようと思う。誰も知らぬ
辺境の地へ」「そうか。寂しくなるな。だが、勘違いするな。お前
が3年前にシヨットガンナーに会ったから狂った訳ではない。狂っ
た世界に飲み込まれただけなのだ。どこへ行ってもその理屈は変わ
らない。何もな」「そうかもな。だが、俺が出ていけば、お前やボ
ス、ピートにしても悲しまずに済む。何も言わずに出ていくよ。餓
別代わりにせめて見送ってくれ」「……お前は土の神ライダー
の継承者なんだろう？それはどうする？」「……土の神は……
継承されなかった。それを背負った俺は一生、償って生きなくては
いけない。一生な」「アア。ここにいたかお前たち。さて、俺も付
き合おうか」酒の樽を抱えたボスが歩いて来た。「レオ、チャंक。
それにピート。君達は今日付けで解雇だ。解雇ってより保安所を閉
めたんだがな。全権を上層部に預けた。……これで良いんだ」「
すいません。何もできなくて」「良いんだ。レオ。さあ飲もう。酔
った頃には上陸してるさ。誰にも気づかれんだろう。酔っ払いなん
て」

ウエストホースの遙か彼方より、船が上陸する。高台で見つめるピ
ート。

「あれが上層部。なんて大軍なんだ。奴等が上陸した大陸は全て支配下になっている。おそらくここも長くは無いだろう」

ジユブナイルも上陸する。「さて、久しぶりの大地だな。行こう、アドニス」「待てよ。飯、飯！残してるし。もったいない」アドニスはパンをくわえながら上陸した。

「アインシャーク。ここがウエストホースか？随分、枯れ果てた土地だな」「アア。だから囚人向きなんだろうよ」「なるほどねえ。じゃ、まあ、行きますかね」「アドニス。わかってるな。土の神ライダーの継承者はショットガンナーの後に探せば良い。どうせ手掛かりも無いんだ」「まあな。上層部に顔を立てりゃ、協力してくれんだろ？」「それだけじゃない。力を求める者はいずれ神々の器に挑戦したくなるのさ」「そうか。さすが皇帝閣下。つまりショットガンナーを追えば土の神ライダーにぶつかると。いずれ」

「皇帝閣下ー！閣下ー！作戦会議やりますからー。ちょっと来ていただけませんかねー？」元老院がアインシャークを呼ぶ。「アア。今、行きますからー」

「元老院様。彼が話していた、火の神インフェルノの遣いアドニスです」「心強い！聖騎士ロキの継承者に神の遣いですか」

続く

帰らざる時の果て その3

アインシャーク三世とアドニスとは元老院と共に盗賊団のアジトへの武力介入の作戦会議をしていた。

「良いか。我々が魔方阵の煙幕を張る。それである程度は抑えられるはず。そこで、突入してほしい。第1陣が中に突入し2陣はバックアップ。剣士1の援護2のトライアングルフォーメーションで乗り込む。質問は？」
「我々は2陣で行こう。上層部を援護する。状況も見たいからな。良いだろう？アドニス」「ウム。作戦は明朝決行する。今日はゆっくりするがいい」「わかりました。それでは明朝」

アインシャークとアドニスはしばらく大陸を散歩していた。

「ハー。やはり大地は良いなあ。いつも飛空艇の旅で飽きていた頃さ」「まあ、そう言うな。アドニス。空き時間ができたんだ。探すぞ、土の神ライダーの継承者を」「なんだ？あいつら。墓場で飲んだくれやがって」「アア。保安所の連中らしいぜ。まあ、無理も無いさ。初めて上層部が上陸したんだからな」「つまり、用無しか？見事なご身分だな。真つ昏間から飲んだくれやがって」「まあ、良いさ。まずは情報収集だな」二人はレオ達に近寄る。

「すみません。保安所の方々ですよねえ？連中について教えて頂けませんかね？」「アー……………ヒック……………あんたらは？」「失礼しました。浮游城から参りました。皇帝のインシャーク三世です。こいつはアドニス。火の神インフェルノの遣いです」「ヒック……………火の神？こいつが？よせやい！神々の話しなんか。アー……………アドニス。わりいこたあ言わねえ。出ていきな。あんたらには勝てる連中じゃないさ。実際、俺みたいな土の神ライダーの継承者が逃げ出してきたんだから……………ヒック」レオ・バレッタは酔っ払いながらアドニスに忠告した。「ヨセ！レオ！俺達の都合だ。皇帝閣下。悪いが我々は協力しないからな」「土の神ライダーの継承者？貴方が？」「ケツ……………おめえらも疑うのか？ちようどいい。チャンク！リンクするぞ！見せてやるうぜ。あの姿を」「餞別か？良いだろう。レオ！行くぜ！」レオとチャンクは起き上がり、対角線に立った。「行くぜ！レオ！飛べ！」「オツケー！行くぞ！チャンク！リンクアップ！」

レオは飛び上がり、空中でチャンクと重なる。紫色の球光が輝き、徐々に白金に変わる。白金の球光は人間の形になり、レオとチャンクのリンクアップが成功する。

虎の胄を纏い、肩に二本のランチャーを装備した、重装騎兵レオ・バレッタ。それが土の神ライダーの継承者だった。

「コッ……これは？アインシャーク！」「俺も見せなくてはな。始皇帝ロキよ。我に力を！」アインシャーク三世はガントレットオーブを太陽に翳した。

キーン

オーブが輝き、青い鎧を纏った、大剣を背中に背負った騎士ロキ。それは古代の聖戦の時の姿だった。二人は精神の世界で会話した。

「ロキよ。古代史の聖騎士ロキよ。久しぶりだな。五百年の月日が経つか？」「ライドー。変わらん。今はレオ・バレッタか？何があつた？この大陸で」「……………私は彼の愛人の死で目覚めた。彼の愛人マリアと相棒チャンクの心がリンクして目覚めたのだ。彼の愛人はショットガンナーに殺られた。再び出会った時、剣ミサトを亡くした。悲しみの底で、彼はこの力を封印しようと苦悩している。この力が人を殺めた。ロキ。彼には関わらないでくれないか。もうあんな想いはさせたく無いのが現状だ。古代史の時代は終わったのだ。他を当たれ」「待て！待って！待て！ライドー。それで良いのか？世界のバランスが崩れようとしている。再び出会ったのも何かの縁だ。協力してほしい」「ならぬ！彼の為にも封印するべきだ！我々は後継者の為にも残していない。それで良いのだ」「……………変わったな。ライドー。昔の前はそんな話しはしなかった。無理に強要するつもりは無い。気が変わったら来てくれ。忘れるな。聖騎士ロキも上陸したのだと。必ずお前を連れ戻す。聖戦の世界に。」

必ずだ。忘れるな」「覚えておこつ。それでは……………」

レオ・バレッタはリンクを解いた。

「アインシャーク。お前は自分の道を行け。俺はこの大陸を出る。何処か辺境の地へ行くさ。じゃーな」「レオ・バレッタ。土の神ライドーの継承者よ。辛い想いをさせてしまったな。気にしなくて良い。私もし貴方と同じ状況なら、とっくに捨てている。貴方は貴方で良いのだ。できればまた会いたい……………」「……………暫し時間をくれないか？この力の使い道を見失っている」「……………そうだな」「二人は向かい合った。「聖騎士ロキの継承者。浮游城の皇帝閣下。会えて光栄でした。それでは」「ウム。じゃーな。レオ」レオ・バレッタは船でウエストホースを旅立った。行き先は誰も知らなかった。「チャंक。お前は良いのか？ついていかなくて」「アア。ここで奴の帰りを待つさ。すまないな。アドニス。何もできなくて」「気にするな。お前は明日行くのか？盗賊団のアジトに？」「相棒のいない奴など居ても邪魔なだけだろう？俺の相棒はレオ・バレッタ。ただ一人だ」「忠実な奴だなあ。珍しい虎だ。チャंक」

続く

帰らざる時の果て その4

アインシャーク三世達がレオと別れた頃、黄泉の世界でも物語が始まるうとしていた。

剣ミサト、ボスコ、マリア、ジャック・ギャザリス、パトレシアはショットガンナーを見たと言う、パトレシアの記憶を辿り、一路、向こうの山まで出掛けるのだった。

「確かな、この辺で木の実を食べてたんだ。覚えてるさ、このドングリは格別だからな。で、……………はて？なんせ3年も前の出来事だ。奴に会ったのは。無理な話しだよなあ。なんせ最近じゃ、昨日食べた餌まで忘れてるしな。しまいにや餌まで忘れんじゃねーか？」「このバカ馬！すっかりせんか！」「ジャック。無理も無いわ。この辺は間違い無いわよねえ。パトレシア」「オオ。なんせ旨いんだ。なあ、良いだろう？一休み。飯の時間だ。ハー……………香しい、芳醇な香り。今年のドングリは格別らしいぜ」「四人は腰を落ち着けた。「わかったわ。一休みにしましょう」「ミサトが施す。「しっかし、エエ天気だべさ。オラ達、死んでるだべか？」「ボスコが腰を下ろす。「本当ね。心が洗われるわ」「食うか？干した肉？」ジャックが三人に差し出す。

続
く

帰らざる時の果て その5

四人と一匹は黄泉の世界で暖かい日射しを浴びていた。

「ネエ。考えたんだけどさ、アタイ達このままここに骨を埋めるなんてどう？こんな日射しの下ではシヨットガンナーなんてどうでも良いじゃない？」ミサトが野原に横になり、呟いた。「ンダナ。オラもそれで良いだよ。どうせ生きていても辛いだけだべ」ボスコが干し肉をほうばりながら話した。「……………ネエ、ジャック。おかしくない？ここに来たと勝手に彼らのやる気が……………」「彼等のやる気が何かに吸い寄せられているみたいだ。まるで何かの呪いの様に」「この山には何かがある。調べてみましょう。二人で」「アア。暫くはここにいそうだからな」二人は、パトレシア、ミサト、ボスコを置いて調べに行った。

「ネエ、ジャック。あの寺院は？」「凡字が書いてある。黄泉の魔方陣が。何故ここに？」「生命を死に導く凡字。聞いた事はあるわ」

「厄介な話だな。凡字なんて。死超星の文字。死を越える星。遠く宇宙の果てから来たと言われる」「怖じ気づいたかい？ジャック？」「別に。だが嫌な予感がする。まあ、俺らは死んでるからな。その先には……………」「黄泉帰り。つまりシヨットガンナーもこの道を

通った。アタイを殺めたあの男も」「調べるか。あの寺院を。凡字で作られたあの寺院を」「他に宛があるのかい？」

二人は寺院へ向かった。扉の前には二人の男が立っていた。カツと目が赤く光り、二人は立ち止まる。「ウツ……………動けない……………なんてプレッシャーだ。これが凡字の力なのか？」二人の男は話しかける。「旅人よ。我が名は霸王。死超星の騎士」「我が名は仁王。同じく死超星の騎士。ナンジラの目的は？」「1つ聞きたい。3年前、ここにシヨットガンナーは来たか？」「来たらどうする？後を追うか？」「アタイは奴に殺められた。その後、レオ・バレッタとチャンクと共に奴に止めを刺したんだ。そんな奴がまだ生きているケリを着けなきやいけないんだ」「今、呪いに掛かっている二人もか？」「やはりお前らの仕業か？霸王、仁王。なぜそんな真似を？」「試練だ。彼等に戻る想いがあればこの呪いは解けるだろう。戻る想いは力になる。戻る場所があるから輝ける」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6189y/>

第5話 帰らざる時の果てその1

2011年11月22日21時47分発行